

## 2 司馬江漢 しちりがほます 《七里ヶ浜図》



江戸時代には油絵も描かれていたんですよね。  
江漢さんの《七里ヶ浜図》もそうですね。



そうじゃろ。蠟画という、えごま油などを調合した手作りの油絵で、浮世絵で描かれてきた「名所」、つまり観光スポットを描いたんじゃ。



墨で描いた山水画よりもカラフルで、立体感がありますね。



オランダの輸入書を読んで、遠近法や陰影法を研究したんじゃ。山水画では表現できないような奥行きのある空間に、みんな驚いたもんじゃよ。



現代の私たちが見ると、なんだか懐かしいような、ほっこりする絵ですね。



おぬしらの目でみると、そう見えるのじゃな。西洋画法を独学で身につけたわしの絵は、とても斬新だったんじゃよ。たとえば、空を青く描くのも、これまでの日本にはみられなかったんじゃ。



そうなんですか!? 意外です。言われてみると、墨で描いた山水画には、色がぬられていませんね。



地平線も低くとられていて、おぬしらがカメラとかいう機械で写真をとるときの構図に近いじゃろ。これも新しい風景の見方だったんじゃよ。



司馬江漢《七里ヶ浜図》江戸時代後期（1800年頃）大和文華館